第三党形成過程初期における章伯鈞

周　偉　嘉

目　次

1．問題の所在
2．生い立ちと国民革命参加への過程
3．南昌暴動の失敗と第三党の結成
4．反蔣大連合と第三党の再分裂
（1）第三党の再分裂
（2）章伯鈞の農工革命論
5．結語

1．問題の所在

章伯鈞（1895～1969）は第一次国共合作分裂後より1940年代の末年に至るまで，中国の代表的な第三勢力の政治家として活動した人物である。1920年代の初期，急進的な知識人としては彼はいちはやく中国共産党に入党し，国共合作の時代に留学先のドイツで中国国民党に加入した。1926年留学先から帰国後，彼は激動の大革命時代の奔流に身を投じ，大学の教授の地位を捨て，鄧演達指導下の国民革命軍総司令部政治部に参加した。1927年国共合作崩壊後，章伯鈞は同年８月１日の南昌暴動に参加し，蜂起部隊の総政治部副主任を務めた。

南昌暴動失敗後章伯鈞は，譚平山らと共に第三党と総称される[1)]中華革命党の結党に加わり，その主な指導者の一人となった。第三党は第一次国共合作分裂後，中共から離脱した人々と国民党左派の一部を中心に組織されたもので，創設当初よりこの二つのグループが異なった政治的見解をもっていた。章伯鈞はかつての中共の一員であり，また鄧演達ら国民党左派系の人物にも近いことから，この二つのグループの橋渡しの

人物となった。中華革命党の結成及び中華革命党から中国国民党臨時行動委員会（以下，臨時行動委員会と略す）への改組の過程において，章は重要な役割を果した。臨時行動委員会成立後，章は宣伝委員会の主任に選ばれ，文人派の首領と見られた[2)]。鄧演達の死後，章伯鈞は季方ら党内主流派と対立し，北京で中国問題研究会を作り，臨時行動委員会を農工革命党に改組するために積極的に活動した。その政治綱領として，彼は「われわれの最近の政治主張」（以下，「最近の政治主張」と略す）を出し，小ブルジョアジーを排除する急進的な路線を提起した。その変化には第三党の後の中共との協力への転換の端緒が示されていた。

第三党は国民党に反対したのみならず，中共にも反対していたため，章伯鈞のような第三党の主要な人物の研究は中国において長い間タブーとされてきた。1970年代に入って第三党の研究に進展が見られはじめたものの，章伯鈞に関してはいくつかの伝記的紹介のみで，本格的研究は殆どないといってもよい[3)]。その原因としては政治的な理由[4)]の他に，章伯鈞が残した文章が少ないことが挙げられよう。

本稿は，章伯鈞の生い立ちを紹介し，第一次国共合作分裂後より1932年に至るまでの初期第三党の形成と分裂の過程，その過程における章伯鈞の活動と思想を明らかにすることにより，福建事変およびそれ以後の中共との協力への第三党の路線転換の原点を示そうとするものである。

2．生い立ちと国民革命参加への過程

19世紀末から20世紀の初頭にかけて，中国は激動の革命時代であった。この時代に成長した近代中国知識人は深くその時代の影響を受けた。

章伯鈞は1895年11月，安徽省桐城県に生まれた。三人兄弟の長男であり，上の弟は伯韜で，下の弟は伯仁である。父親の名は章楊清で，章伯鈞が7歳の頃亡くなった。

章伯鈞の生年と同じ年の3月1日に，広東省恵陽では鄧演達が生まれ，後にこの2人は中国第三党運動の代表的な存在となった。2年後中国では戊戌の政変が起こり，章伯鈞は幼い頃からその影響を受け「1898年戊戌の政変の2，3年後，当時わたしはちょうど6，7歳の頃であった。同じ村の10人ほどの子供たちがどこから聞いたか，教わってきたかわか

らないが，たがいに『孫文をつかまえろ』，『康（有為），梁（啓超）をつかまえろ』と言いながら，鬼ごっこをして遊び」，「わたしもその仲間で，よく追いかけられて山中を逃げ回った。これは自分が参加したはじめての造反活動であった」という[5)]。かれは6歳から，叔父が開いた塾で学び，翌年故郷の育才小学校に入り，卒業後桐城中学校で学んだ。父を亡くした章伯鈞は叔父に育てられた。1911年の冬，卒業試験が終わった頃，辛亥革命が勃発し，桐城の小中学校の学生と一緒に祝賀パレードに参加した。

1916年，20歳の章は古い文化を有する桐城県を離れ，近代的文化都市の武漢に出て，武昌高等師範学校英文系に入学した。武昌高等師範学校は1913年に設立され，当時北京，南京，武昌に作られた三つの高等師範学校の一つである。学校制度は日本を見習い，日本から帰国した教員が多数を占めていたといわれる[6)]。武昌は辛亥革命の発祥地で，1916年民主と科学の旗を掲げて，封建専制に反対する新文化運動が行なわれ，武漢の互助社・利群書社といった団体も，新民学会，覚悟社などと並んで全国に知られていた。武昌の出身者としては，中国における初期の共産主義的知識人である惲代英，蕭楚女，また国家主義的傾向の知識人である余家菊，陳啓天などがいた。章伯鈞はかれらと同世代であり，武昌で惲代英，蕭楚女らと知り合い，新しい潮流に出あった。五・四運動の時，章は武漢高等師範学校の代表に選ばれ，また武漢学生連合会の9人代表の一員としてはじめて学生運動に身を投じたのであった[7)]。そしてこの年，かれは4年間の学業を終え，1920年の春，故郷に帰った。

1920年代の初期において，新しい世代の中国知識人の政治思想は大きく二つのグループに分かれる。一つは孫文思想を受け入れた人々であり，いまひとつは社会主義思想に傾いた人々であるが，章伯鈞はその中間に属する人物であった。

彼は故郷に帰ってまもなく，安徽蕪湖第二農業学校の「学監」となった。孫文思想に接するきっかけは，彼が「修身」の授業を担当したとき，「孫先生の行易知難の心理建設の言論と以前から身につけていた王陽明の知行学説とを混ぜて」[8)]，北洋軍閥政府教育部の「修身」の教科書の中にとり入れ，学生に教えたことであった。その後，彼は宣城師範学校の英文の教員に転任した。1920年代の初期，倪嗣沖に継いで，許世英が

安徽省の省長に就任した。許世英の支持を基盤として，桐城地方の有力者である房秩五[9]は蕪湖道尹となり，宣城はその管轄下にあった。章伯鈞と房秩五は遠縁にあたり，章は房の推薦により宣城師範学校の校長となった。章は就任するとすぐに，惲代英を宣城師範学校の教務主任に招聘した。惲代英は五・四時期の著名な人物で，社会主義思想をもつ知識人でもあった。そのため，宣城では旧勢力から猛烈に反対され，惲は宣城師範学校に来てから半年ぐらいで退職を余儀なくされた[10]。惲の後に，章伯鈞はまた利群書社の社会主義的知識人である蕭楚女を宣城師範学校に招聘した。しかしまもなく省の教育当局により，蕭も辞職に追い込まれた。その後を追う形で，章も１年たらずで宣城師範学校をやめることになった。以上から，章が社会主義の思想に接近していったことがわかる。

宣城師範学校を辞職した後，1921年章は一度北京に赴き，米国留学を目指して「庚款」試験を受けたが，失敗した。その頃中国では，蔡元培，李石曾，呉稚暉らの鼓吹によって，フランスを中心としてヨーロッパにおける勤工検学運動が盛んになってきていた。当時，愛国心に燃え，近代化を求める若者たちが，あらゆるチャンスをとらえてヨーロッパに渡るのが，大きな社会風潮となっていたのである。章伯鈞もその影響をうけて，ふたたび房秩五の関係を通じて，安徽省の公費でドイツへ留学する機会を得た。1922年９月，章伯鈞は房師亮[11]夫妻とともに上海からフランスの郵船でドイツに出発した。その船で，彼はおなじくドイツへ留学する朱徳，孫炳文に出会った[12]。章はドイツに着いて後，ベルリン大学に入学し，ヘーゲルの哲学を専攻した。

第一次世界大戦後，ヨーロッパは大きな社会的危機に見舞われ，労働運動が高まり，西欧的近代化を望む中国人留学生の多くは，ソ連のような社会主義制度に目を向けるようになった。1921年の春，ヨーロッパ留学生の張申府，周恩来ら５人によって「共産主義小組」が結成された。1922年２月に張申府，周恩来らはドイツに行き，そこでも共産主義小組を成立させたが，初期のメンバーには張申府，劉清揚，周恩来，張伯簡がいた。後に，章伯鈞，鄭太朴，高語罕，李季，熊雄，朱徳，孫炳文，廖煥星，謝唯進など十数人が加わった[13]。当時，ドイツにはベルリン，ゲッティンゲン，フランクフルトに三つのグループがあり，章伯鈞はベ

ルリン・グループに参加したという[14]。1923年６月，中国共産党は広州で三全大会を開き，中共党員全体が個人の名義で国民党に加入することを正式に決め，11月に上海で一中全会を開き，中共党員と社会主義青年団員は各地の国民党の組織に入ることが具体的に決定された。その頃，孫文は王京岐をフランスに派遣し，フランスの中共組織の協力を得て，ヨーロッパの国民党組織の改組に着手した[15]。ドイツにおいて1923年の末，孫炳文は直接にコミンテルンから国共合作の指示を受けて国民党を改組し，朱徳，夏秀峰，李季，廖煥星，房師亮，謝樹英らは国民党に参加したという[16]。1924年の冬，鄧演達は蔣介石の腹心の王柏齢に排斥され，やむなく黄埔軍校訓練部副主任を辞職し，翌年の春にヨーロッパに渡り，おもにドイツで政治，経済を研究し，国民党ドイツ支部の活動にも積極的に参加した。章伯鈞は鄧演達らと政治討論会を組織し，西欧の社会民主主義思想と孫文主義を研究し[17]，鄧と思想的に共鳴し合った。1925年，章が国民党に加入したのもこの時期であった[18]。この出会いは後に章と鄧演達との絆となった[19]。

1925年７月の広州国民政府成立後，中国国内の革命情勢の進展により，人材が欠乏し，国内の党組織の要請に応じて，ヨーロッパに留学中の中共党員は続々と中国に帰国した。ドイツ留学生達も，朱徳ら一部の人々はモスクワ東方大学に行き，孫炳文，房師亮らは帰国した。鄧演達も1925年の冬，ソ連を経由して広州にもどった。1926年の年初，章伯鈞も４年間の留学生活を終え，広州に帰還した。広州はいまや国共合作の中心地であり，広東国民政府の首都となっていた。章伯鈞のドイツ留学時代の仲間，熊雄は黄埔軍官学校の総教官，政治部主任の職につき，鄧演達も国民党の要職につき，孫炳文は黄埔軍校の教官，広東大学（1926年７月中山大学に改名）の教授を務めた。当時広東大学文学院の院長は郭沫若で，孫炳文と郭は同郷の四川人であった。孫の推薦により，章は広東大学文学院の教授に招聘され，ドイツの普哈徳（ドイツ語の原名不明）が注釈をつけた『資本論』を教えて，名を馳せた[20]。また章伯鈞は当時のヨーロッパ留学生の中で，高い学歴を有する数少ない人物の一人であり，中共広東大学組織のなかでは「特殊党員」，また惲代英に「博士風の官僚の典型」とも言われた[21]。1926年７月１日，広州国民政府は『北伐宣言』を発表し，北伐戦争が始まり，蔣介石は国民革命軍総司令，李

済琛は参謀総長，鄧演達は総政治部主任を務めることになった。総政治部はもともと広州国民政府の政治訓練部であり，国民革命軍総司令部が発足後，1926年６月[22]総司令部政治部に変わった。

新たに組織された総政治部の人事では，孫炳文は広州にある総政治部留守処主任，朱代傑が事務局長，郭沫若は広東大学文学院院長を辞めて，宣伝科長になり，章伯鈞は組織科長に任命され，後に総務科長に江董琴，党務科長に季方が加わった[23]。北伐の途上で，総政治部主任の「鄧択生（演達）はいつも総司令部にいて，軍事工作に参与せねばならなかったので」，政治部の仕事はたいてい郭沫若が代わって処理した[24]。1926年12月に総政治部は組織を拡大し，副主任に郭沫若が就き，朱代傑は事務局長と宣伝科長を兼任し，江董琴が東路軍の総政治部主任になったため，郭冠傑が総務科長に就任した。一方，章伯鈞は引き続き組織科長を担当した[25]。

武漢政府の時期，国民党左派と蔣介石との対立[26]により，総政治部はその立場を「擁護蔣総司令」から「擁護中央的領導」にかえ，それが蔣の怒りをかい，宣伝科長の朱代傑が蔣により免職された[27]。それにかわって，組織科長の章伯鈞は宣伝科長を兼任するようになった[28]。宣伝科長は政治部の実権を握るポストであり，「政治部のナンバー・３の人物は章伯鈞科長で，彼は当時総政治部の各科長の中でもっとも権力があり，鄧（演達），郭（沫若）が不在の時，彼が問題を解決できるから，われわれはよく章科長を探しに行った」と言われている[29]。この時期，郭沫若は総政治部南昌駐在事務所にいたため，章伯鈞の地位はしだいに上昇していった。

1926年12月，湖北政務委員会の決議により，国立武昌中山大学の創設が始まった。そして鄧演達，董必武，戴季陶，郭沫若，徐謙，顧孟餘，周仏海，章伯鈞からなる企画委員会が設置され，章伯鈞はその主要なメンバーとして，委員長の徐謙が着任する前には委員長代理を務め，1927年２月の国民党中央党部・政府第22次連合会議で，徐謙，顧孟餘，周仏海とともに国立武昌中山大学五人委員会の委員に任命され[30]，積極的に国立武昌大学の創設にかかわった。

1927年１月３日，武漢大衆は北伐の勝利と国民政府の武漢への移転を祝う集会を行なった。中央軍事政治学校の宣伝隊は漢口イギリス租界の

付近で，上陸したイギリスの水兵隊と衝突し流血事件を起こした。事件後，章伯鈞は直ちに蔣介石と鄧演達に電報で事件の真相を報告した。これをうけて鄧演達は翌日次のような返電を送った。

「武昌政治部章科長，政治科長周仏海同志及び諸同志机下：章の電報を読み，政治科の学生でさえ英国兵に殺され，死傷者が相次いだことは憤激にたえない。厳しく処理するよう外交部に通電することを総座（蔣介石）に要請した。その次に即座に対応すべきであり，また学生たちには哀悼の意を表する。演達，支申（１月４日）。」[31]

漢口「一・三」事件は武漢政府とイギリスとの関係を一層緊張させた。事件当日，武漢各界の約500人が連合会議を組織し，１月５日，その下で数十万人がデモを行なった。デモ隊はイギリス租界にはいり，英租界管理委員会を組織し，翌日武漢政府は英租界を接収した。２月７日，章伯鈞は鄧演達の代理として，総政治部の名で新聞招待会を主催し，漢口「一・三」事件，労農政策などの問題について説明し，世論の協力を求めた[32]。２月19日に英政府は正式に武漢政府と協定を結び，漢口英租界を中国に返還した。

1926年の後半から，農民問題が武漢政府にとって大きな問題となっていた。1926年１月以後，湖南，湖北の農村では地主から土地を接収して農民に再分配し，農民協会が農村の唯一の権力機関となった。この事は地主やその軍人仲間の激しい反発を招き，国民党右派と中共の一層の対立をもたらした。1927年にはいって，総政治部は農民問題討論会を組織し，その委員の中には李達，惲代英，郭冠傑，陳啓修，施存統，陸沈，毛沢東，張治中，黄琪翔，顧孟餘，徐名鴻がいた。農民問題討論会は中国農民の実際の生活状況，中国革命における農民の地位，世界の農民運動及び農民の生活状況，各国の学者の農民運動に関する理論などについて研究し，章伯鈞は李達と共に農民問題に関する書籍と資料の収集の任務を引き受けることになった。討論会議の日程には毛沢東も「中国農民運動の状況」に関して，報告する予定の記述があった[33]。この時期毛は湖南省の視察旅行から帰ったばかりであり，彼の「湖南省農民運動視察報告」はその時期に生まれたものである。そこで彼は，地主の土地を没収することを主張した。国民党は土地研究委員会（農民問題討論会）を設立し，共産党側も委員会を設立したが，後者（中共側）の会議は開

催されず，かえって鄧演達が毎回毛沢東を国民党側の会議に招いていた[34]。鄧演達がいない時章伯鈞は会議の主席となり，農民問題に大きな関心を寄せた。1933年の福建事変の時，章伯鈞が土地委員会の主任を担当したことは，おそらくこの時期の経験と大いに関係があったであろう。

農民問題を大きな争点として国民党と中共の関係はますます悪化してきた。1927年４月12日，蔣介石は上海で反共クーデターを起こし，それと前後して，福州，九江，安慶，蕪湖などでも「赤狩り」を行なった。これに対して，鄧演達が率いた総政治部も反蔣の姿勢を鮮明化し，総司令部に所属していた総政治部を武漢政府中央軍事委員会に変えた。これにより蔣介石の恨みを買い，４月14日に蔣介石は正式に上海の郭沫若を主任とする総政治部事務所を閉鎖し，また広州総政治部留守処主任孫炳文は武漢政府軍事委員会総務，軍事庁長官に就任するため，上海を経由する途中蔣に逮捕され，殺され，蔣側の曾養甫が孫炳文の代わりに広州留守処主任になった[35]。鄧演達の報告では，東南地域から逃げてきた総政治部の人々は300～400人に達し，将来は1000人に上るであろうとされている[36]。５月17日，鄧の北伐軍が河南前線に赴き，守備軍の手薄に乗じて湖北で唐生智旗下の夏斗寅が軍事反乱を起こし，21日には許克祥が長沙で湖南省の労働組合，農民組合を包囲攻撃する事件があいついで起こった。そして６月10日から数日間武漢政府の汪精衛，譚延闓，唐生智らが鄭州で馮玉祥と秘密会談を挙行した後，武漢政府の反共化と「汪（精衛）蔣（介石）合流」への路が開かれたのである。

こうした状況に対処するため，章伯鈞は鄧演達，譚平山らの第三勢力を結集する試みに協力したが，武漢政府の急速な分裂により成功しなかった[37]。６月30日，身に危険の迫った鄧演達は「中国国民党同志たちに告別する」という文書を書き，武漢を去り，７月15日，武漢政府は正式に中共を排除することを決めた。章伯鈞は急遽九江に避難し，まもなく南昌に駆けつけ，８月１日の武装暴動に参加し，失敗後正式に第三党運動に身を投じた。以上において，章伯鈞の生い立ちと彼の国民革命参加への過程を概観した。そこで，つぎに，章伯鈞が南昌暴動に参加し，その失敗後，第三党の結党にかかわるまでの過程をみることにしよう。

３．南昌暴動の失敗と第三党の結成

武漢政府の中共排除により，鄧演達を中心とする総政治部系統の国民党左派は武漢政府と決別し，その一部は中共が指導した南昌暴動に参加した。南昌暴動失敗後，譚平山ら中共から離脱した人々と暴動に参加した国民党左派分子を中心として上海で第三党が結成された。これは近代中国政党史における第三勢力の先駆けとなった。章伯鈞はその中心人物の１人として，いちはやく第三党運動に身を投じた。本章では南昌蜂起から第三党の結党に至るまでの章伯鈞の活動の分析を通じて，いままで明らかにされていない初期第三党の実態を考察する。

武漢政府分共の直後，江西省の九江，南昌は一時中共と一部国民党左派の避難地となった。ここには1927年７月から蔣介石を討伐することに備え，左派系の張発奎が率いた国民革命軍第二方面軍が駐屯していた。その中には以前から第四軍と第一一軍が含まれ，また中共影響下の賀龍を軍長とする第二〇軍，葉挺を師団長とする第一一軍二四師，朱徳を連隊長とする第三軍軍官教導団などがあり，総勢２万人ぐらいであった[38]。

1927年８月１日，蔣介石の南京国民政府，汪精衛の武漢政府の反共化に対抗するため，中共が指導した南昌暴動が起こった。当日の午前中，国民党中央執行委員会及び各省，区，特別市，海外党部代表は連合会議を開き，権力機構として中国国民党革命委員会を選出した。注目しなければならないのは，その中に後に第三党運動に加わった人が少なくなかった点である。例えば譚平山（南昌暴動の主要な責任者，革命委員会主席団責任者），江蘇省代表の張曙時（革命委員会党務委員会主席），安徽省代表の朱蘊山（党務委員会委員），江西省代表の肖炳章（革命委員会秘書），彭沢民（革命委員会委員），李小青（農工委員会委員），張餘生（党務委員会委員），周士第（第二五師団の師団長）などの人がいた[39]。章伯鈞はこの連合会議の副事務局長を務め，また蜂起部隊の政治部副主任に任命された。政治部主任は第二方面軍の副党代表，郭沫若であった[40]。郭が張発奎から南昌蜂起のことを知らされ南昌に駆けつけたのは，暴動部隊が広東に出発する前日であった[41]。郭沫若が総政治部主

任に着任する前，章伯鈞は総政治部主任を代行し[42]，郭沫若が職についた時，政治部の仕事はきちんと処理されていたという[43]。蜂起部隊が広東へ出発して後，章伯鈞は朱徳の第九軍に従って行動した。10月2日から朱徳の部隊は広東の三河壩で銭大鈞の部隊と3日間激戦し，戦闘中，章伯鈞は主力部隊とはぐれ香港にたどりついた。1927年の末，章伯鈞，譚平山，季方などは相次いで上海に集結した。

そもそも第三党思想は1926年11月国共合作の危機を打開するために譚平山によって提起され，武漢政府崩壊の直前に第三党創設の端緒が開かれた[44]。中共の文書に示されるように，南昌暴動の時にも譚平山は国民党の左派と連合して，第三党の創設の宣伝を行ない，新党結成の活動を始めたという[45]。第三党結成の契機は南昌暴動後，譚平山が中共から除名されたことにも関係があり，章伯鈞はそのために自分も悲観的になったと証言している[46]。譚平山の除名に従って中共から離脱した人間は3千人におよんで，その中には第三党にかかわったかなりの有力な人物もいたといわれている[47]。

鄧演達らが1927年11月1日にモスクワで発した「中国国民党臨時行動委員会の中国及び世界の革命的民衆に対する宣言」（以下，モスクワ宣言と略す）[48]にいっそう励まされ，譚平山，章伯鈞，季方，朱蘊山らは上海で国民党左派連合事務所を設立し，武漢政府崩壊後に上海に避難してきた中共及び国民党左派の人々を集め，新党の創設を進めた。章伯鈞は譚平山と上海の旅館に泊まり，毎日結党のため人集めに没頭した。当時のことを次のように回想している。

「私は郭沫若を訪れたことがある。郭はわれわれの主張に非常に賛同し，われわれと共に奮闘しようと考えた。ちょうどこの頃，周恩来も彼に働きかけた。彼は病気中であったが，周恩来の意見を受け入れ，中共に加入した。同時に周恩来はわたしにも話しかけてきて，わたしは中共から除名されたわけではなく，ただ監察中の身であると言い，革命の事業に自信を無くさないように勧め，妻と一緒にモスクワへ行くように言ったが，わたしは婉曲な言葉で断った」[49]。

周恩来は1927年11月の中共中央臨時政治局拡大会議後，中共中央の組織局代理主任，そして主任を務めた。章伯鈞の回想から，当時，中共側と第三党が共に中共の組織から離脱した人々に働きかけていたことがわ

かる。

新党の創設にかかわった国民党左派の人としては，江董琴（元国民党福建省政務委員会委員，武漢政府崩壊直前の武漢市公安局局長），鄧初民（元湖北省国民党党本部執行委員，湖北省政府委員），黄慕顔（元一五軍副軍長，第一師団長），季方（元北伐軍総政治部党務科長，第二二師団党代表，政治部主任），王枕心（元国民党江西政務委員会委員，一四軍政治部副主任）などが挙げられる。

党派としての新党の結成には困難が伴った。もともと中共と国民党は異なった政治理念をもつ集団であり，中共は西欧とロシアからのマルクス・レーニン主義をイデオロギーとし，国民党は孫文の三民主義を思想の指針としていた。この二つの政治集団から出た人々は，新党を結成するために，共有できる新しい価値を創出しなければならなかった。そのため結党当初，譚平山らは新たにマルクス主義の弁証法的唯物主義で孫文の三民主義を解釈しようとして，科学的三民主義を提唱した[50]。しかし，これは鄧演達らが「モスクワ宣言」の中で，孫文の三民主義の正統性を継承しようとする姿勢とは異なっており，鄧を領袖とする国民党左派のグループに反対された。この新党の主義に対する認識の違いは，党の名称の問題を巡って表面化した。譚平山は新党を中華革命党と名づけ，1914年に孫文が中華革命党を組織した方法を用い，実際に国民党と中共に対抗する第三党を創設する意欲を見せた。これに対して張曙時[51]らは鄧演達が「モスクワ宣言」で使った中国国民党臨時行動委員会を新党の名称とすることにこだわっていた。そのため，新党の名称，党綱は1928年春までに決められないままの状態であった。

1928年年頭から新党に対するいろいろな推測が流れていた。例えば上海の新聞は，譚平山の中国社会民主党の創設に関する報道を掲載した。これに対して譚は，直ちに『申報』の広告欄でそのことを否認した[52]。その年の2月，譚の旧友楊匏安は中共中央の機関誌『布爾什維克』に寄稿し，新党を大同党と称した[53]。また農工党，中華中心革命党など，新党の名称は5～6通りもあり，第三党の名称もその時期から流布していた。この年の5月，陳公博らは雑誌『革命評論』を発刊し，第三党に党の主義がなく，党名が確定していないことを攻撃の材料にして，新党に対する激しい批判を行なった。その周囲からの攻撃に対処するには，

新党の政治主張を世に公開することが急務であった。そのため譚平山は中華革命党の名義で，「党綱」と「政綱」を提出し[54]，新党の統一をはかったのである。

ここで注目しなければならないのは章伯鈞の立場である。章伯鈞は新党の創設から譚平山と共に行動し，また周知のように，鄧演達に近い人でもあった。党名に関しては，章伯鈞は最初に「農工党」という党名を提案したが，新党の結束のため，譚平山の提案した「中華革命党」を支持するようになった。こうして1928年の春，ようやく中華革命党の活動が始まった[55]。しかし党の総責任者は鄧演達であり，鄧が帰国するまで譚平山がその職務を代理することが党内の合意事項であった。指導機構には主席団と常務委員を設け[56]，譚平山，章伯鈞，季方，鄭太朴，朱蘊山，黄慕顔，鄧初民，張申府，李世璋，馬哲民，王枕心などが中央指導メンバーに選ばれ，実際のリーダーシップは譚平山と章伯鈞ら少数の人が握っていた。中華革命党成立後，譚平山は「中華革命党宣言草案」（以下「宣言草案」と略す）を提出した。また「『突撃』と『燈塔』の機関誌を発刊し，その組織は福建，江西，上海，四川，北京，山東，広州，香港などに広がり，大きな発展を見せた[57]。

しかし中華革命党の結束は弱体であった。1929年にはいると，じきに分裂と解体の状態に陥った。この分裂の実態について，当時中共の雑誌『列寧青年』は第三党の中に譚平山派，鄧演達派，江董琴派があると指摘した。譚平山の主張は中共人士を吸収して，第三党を中心として労農，小ブルジョアジーに働きかけることであり，鄧演達は軍隊があればなんでもできるとし，下級幹部に軍事訓練を受けさせ，彼らを軍隊のなかに派遣することを主張している。江董琴の意見は，民衆を組織し，幹部を訓練することを待てば，手遅れになるとするもので，彼はすでに福建の張貞の軍隊に入り込んだという[58]。

中華革命党解体の大きな原因は譚平山のリーダーシップが確立できなかったことにある。中華革命党は武漢政府崩壊直前の第三党運動の流れを受け継いだものであり，第三党の創設に関しては当初から譚平山と鄧演達の意見が異なっていた[59]。前述した1928年春の新党の結成から，同じ年の6月に譚平山が「宣言草案」を提出するまでの数ヶ月間，新党の党名が決められないまま世論を騒がせた。その真相は，ドイツにいた

鄧演達が「中華革命党」という党名とその「党綱」，「政綱」に賛成せず，また「宣言草案」も鄧の意見により正式に公開されなかったということである[60]。つまり譚平山は党内で国民党左派人脈の強力な支持が得られなかったのである。

中華革命党解体のいまひとつの大きな原因は，政党の資金繰りが窮地に陥ったことにあった。このことについて章伯鈞は，「1929年に我が党の発展は次第に複雑かつばらばらになり，普通の党員は政治上と生活上の二重の圧迫を受けた」[61]と語った。1920年代の末頃，南京国民政府に対抗する党派には第三党の外に中共と国民党改組派があり，いずれもかつては武漢政府の中核にあった人々からなり，その大多数は職業革命家であった。武漢政府崩壊後，その多くは上海の租界に集ってきて，生活の基盤はほとんど失われ，党の組織にたより暮らした人が少なくなかった。政党資金の問題を解決するため，例えば当時中共は重要な党員を一時的に出国させるか，党員の就職などの措置を講じた[62]。国民党改組派の資金について章伯鈞は，彼らが「われわれより優位にある。なぜなら汪精衛の看板がまだ人気があるばかりでなく，半分合法的な地位と多くの資金があり，我が党内の人は途中改組派に転向した人が少なくはなく」，例えば鄧初民，馬哲民，許徳珩などがいると指摘した[63]。

このように中華革命党は党内の分裂，政党活動資金の欠乏などの原因によりその存続自体も危ぶまれたため，鄧演達は季方らに手紙を書き，自分は譚平山と原則論では違いがなく，ただ策略だけ相違があるとして譚の指導を支持するよう呼びかけた[64]。それにもかかわらず，鄧演達が譚平山の提出した中華革命党の綱領を受け入れなかったことは，譚の指導力を大きく弱めることになった。結局，譚平山がその難しい局面を支え切れず，1929年の後半，章伯鈞は朱蘊山，李世璋，鄭太朴，王枕心，蕭秉章の5人と数回にわたり相談して，譚に離職を勧め，鄧演達に帰国して指導するよう要請したという[65]。

1930年5月，鄧演達はドイツから秘密裡に中国に帰国した。中華革命党の改組をめぐり，譚と鄧の対立は直接的なものになったが，その焦点は依然として，中華革命党の党名，綱領にあった。鄧は「現在国民革命の任務はまだ完成せず，孫中山の主張はまだ実現していない。孫中山の旗を継承するためには，孫中山の組織も受け継がなければならない。当

面の急務は蔣介石に反対することで，国民党の看板はまだ使いようがある」と主張し，国民党臨時行動委員会の名称を使うことを強調した。これに対して譚平山らは，蔣介石が革命を裏切り，国民党も反動の組織になったので，国民党の名称を使うことに強く反対し，中華革命党の名称を継続させるべきであると主張した[66]。その結果両者は妥協できず，鄧の主張が多くの支持を獲得した。譚平山は鄧に休暇を願い出て第三党からはなれ，それ以後，第三党にもどらなかった。この論争において，章伯鈞は鄧演達の意見に賛同し，鄧側に立ったのであった。

以上からあきらかなように，中華革命党は武漢政府崩壊前の第三党運動を受け継ぎ，南昌暴動の失敗をきっかけに結成されたものである。第三党をめぐり譚平山と鄧演達の主張は終始異なり，これが中華革命党党内の元中共系のグループと国民党左派系のグループの統合に大きな影響を及ぼした。章伯鈞の思想的背景，革命の経歴から分るように，その立場は二つのグループの中間にあり，これが中華革命党の結成に有効に作用した。しかし，中華革命党は内外の複雑な環境に直面し，結局は共通の政治理念を生み出せずに解体せざるを得なかったのである。

4．反蔣大連合と第三党の再分裂

1930年８月９日，中華革命党の代りに中国国民党臨時行動委員会が成立した。党名は鄧演達が「モスクワ宣言」の中で使った名称であり，これで鄧演達は譚平山を排除した形で，元総政治部系の国民党左派人士を中核に党を再出発させることができた。臨時行動委員会は初期第三党の発展において最も輝かしい時期を作り出した。中央指導機構が整えられ，その組織は全国に広がり，南京政府管轄下の都市において中共を凌ぐ存在となり，蔣介石政権にとっても大きな脅威となった[67]。しかし僅か１年余りで，臨時行動委員会は鄧の逮捕（1931年８月17日）により破壊され，その内部も鄧の後継者などの問題をめぐり再び分裂状態に陥った。その渦中の人物が章伯鈞であり，彼は北京に中国革命問題研究会を設立し，また「われわれの最近の政治主張」を発表して，臨時行動委員会を農工革命党に改組しようとした。本章では臨時行動委員会成立後から再分裂にかけての真相を解明し，その変化の過程における章伯鈞の思想と

役割を検討することにしたい。

1　第三党の再分裂

臨時行動委員会の成立前後にあたって，中国国内の情勢は大きく揺れていた。広西派の反蔣第一戦を皮切りに1929年から1930年までの間に４回の反蔣戦争があった[68]。1931年初頭には，「訓政時期約法」の制定をめぐり，胡漢民と蔣介石の対立が激しくなり，２月28日に胡漢民が蔣介石に拘留されたことにより，胡漢民派は汪精衛の改組派，孫科の再造派および広東派，広西派などの勢力と連合して，５月27日広州で国民党中央執行委員会・監察委員会の非常会議を開催し，５月28日に南京国民政府に対抗する広州国民政府を成立させた。一方，中共の紅軍も反蔣戦争の情勢に乗じて，その根拠地を井崗山から贛南，閩西など十数ヵ所に拡大し，紅軍の数も急速に10万人に増加した[69]。このような反蔣情勢に対応して，臨時行動委員会は反蔣の諸派と連絡を取り，陳誠の部隊が駐在した江西省を中心に，楊虎城，馮玉祥ら武漢，西北，華北などの地域から呼応する，蔣介石の政権を覆す武装蜂起計画を策定した[70]。

臨時行動委員会成立後，章伯鈞は中央宣伝委員会の主任となった。彼は反蔣武装蜂起計画において馮玉祥との連絡の任を与えられた。1930年の冬，第４回反蔣戦争失敗後，馮玉祥は張元栄を上海に派遣し，鄧演達と会談させた。翌年の５，６月の間，馮玉祥はまた上海において，張省三，馮勉之を鄧演達と双方の軍事協力のことについて会談させた。８月中旬，章伯鈞，李世璋は鄧演達の馮玉祥宛の親書を携えて山西省に行き，８月31日汾陽で馮玉祥と会談を行なった[71]。この会談で双方は軍事協力のことで合意し，馮はまた臨時行動委員会に資金援助を約束した。その時，鄧演達が逮捕されたことが伝えられ，章伯鈞は急遽上海に戻った。

鄧演達は1931年８月17日の午後，上海愚園路愚園坊20号の臨時行動委員会の秘密幹部訓練地で陳敬斎[72]の密告によって逮捕され，同じ日に連行された人には臨時行動委員会中央幹部会責任者の羅任一，鄭太朴，沈維岳などを含め，40人ぐらいがいた。11月29日の夜，蔣介石の指示により鄧演達は秘密裡に銃殺された。鄧の逮捕と死により臨時行動委員会の全国組織は大きく破壊され，中央指導者内部も分裂状態に陥った。

前述したように，臨時行動委員会は国民党左派を中心に発足したもの

であった。鄧演達は政権の奪取を主要な目標にして，「軍事第一」を党の活動方針としていたため，黄琪翔，季方ら軍人派といわれる人が党内の主流派となっていた。譚平山が第三党から離脱した後，章伯鈞は譚の第三党における地位を受け継ぎ，章に近い中央組織委員会主任の鄭太朴，中央青年工作委員会主任の李世璋及び王枕心，羅任一らは文人派または左派ともいわれる派閥を形成した[73]。

鄧の没後，後継者の問題で臨時行動委員会指導層の分裂は表面化した。最初に党内では宋慶齢を擁立する意見が大勢となっていたが，宋本人は出馬の意志がなかったため，楊杏仏，黄琪翔，章伯鈞の間で争われることになったという[74]。1931年11月臨時行動委員会は新党首を選出するため，上海福煦路1号で会議を開催した。出席した代表たちは激しく衝突し，会議の結果が出ずに解散し，結局は「中央委員会の何人かの責任者が相談の末，党務は臨時に黄琪翔に担当させた」[75]。しかし臨時行動委員会の「組織の内部では党の綱領，路線及び闘争策略をめぐり意見が分かれ，それを統一する強力な指導者がなかったため，上層部は解体することになった」[76]。例えば中央幹部会指導部の朱蘊山は正式に離党を表明し，李済琛，徐謙らと共に「革命軍人抗日連合会」を組織した[77]。王枕心は江西省主席を務めた熊式輝の所で「農村自治，自救，自養」というスローガを掲げる江西農村実験区の総幹事になった[78]。また鄧死後の臨時行動委員会の指針について，楊杏仏と共に宋慶齢の意見を求めに行った中央幹部会メンバーの謝樹英は，陝西省政府主席の邵力子の所で資源開発の実務に転じた[79]。

章伯鈞も鄧演達死後の臨時行動委員会指導部の一員に選ばれたが，主流派との対立は解消されなかった。1931年の冬，彼は周恵生を通じて北平で北方各省の責任者会議を開き，鄧死後の対策について討議した。その後章伯鈞は北平で「中国革命研究会」を組織し，臨時行動委員会を「農工革命党」に改組しようとして，第三党の主導権を握ることに乗り出した。

北平の第三党組織は最初に章伯鈞の指導によって創設された。1928年の夏，上海を経由して北平師範大学へ赴任した周恵生は章伯鈞の紹介で第三党に入った。章はまた北平の中国大学で教鞭をとっていた同郷の周新民と黄譲之を周恵生に紹介し，後に元総政治部総務科長の同僚郭冠傑

も加え，北平で最初の第三党の組織を成立させ，その後第三党の組織は清華大学，燕京大学及び軍の中にも広がった[80]。1930年10月，張含之，黄譲之を責任者とした臨時行動委員会北方幹部会が北平で成立した。張含之が中央の代表となり，主要な幹部としては周恵生，郭冠傑，周新民，張申府，劉清揚などがいた。以上から章伯鈞は歴史的に北平の第三党組織と深いつながりがあったことがわかる。

現在では，章伯鈞のこのような活動には馮玉祥の支持があったことが明らかにされている。章伯鈞，周恵生らは冉寅谷，張省三を通じて，馮玉祥と連絡をとっていた[81]。そして馮玉祥は彼の代表の張允栄を上海に派遣し，張は，章伯鈞が農工革命党の設立を提起したが，馮玉祥は少々違って「農工革命党」を「工農革命党」に変えようと考えていると述べた[82]。

上海の臨時行動委員会中央は章伯鈞の活動に対して，季方ら一部の人を北平に派遣した。季方らは北平の西兵馬司という所に北辰中学校を作り，北平と天津の一部党員を集めて，1932年8月に「中国国民党臨時行動委員会各省市連合事務所」（以下，各省市連合事務所と略す）を発足させた。各省市連合事務所はその年の8月から10月まで合わせて3回「通告」を出し，章伯鈞ら中国問題研究会の党の分派活動を糾弾したが，そこに中国問題研究会と臨時行動委員会中央の対立の一端を見ることができる。

それは第一に，第三党の改名の問題をめぐる対立である。各省市連合事務所は章伯鈞らの活動に対し次のように批判した。この頃少数の人が勝手に「工農党」，「農工党」を組織し，「中国農工党臨時中央」の名義で「通告」を出しているが，これは「陰で党の系統を乗っ取ろうと企むものであり，また党の路線をひそかに変えようとするものである」[83]とした。各省市連合事務所はさらに国民党臨時行動委員会の党名に関して，第三党は初めから完全に反動の国民党から抜け出したものであると指摘して，今の「党の名称は歴史的な関係からきており，少数の同志の意見で勝手に決まったのではなく，全国代表大会の時に解決すべきであり，これは当初の中央幹部が一致して決議したものである」[84]と述べた。

第二には，第三党政権の特質の問題をめぐってである。各省市連合事務所は章伯鈞らの「農工民主政権」の主張に対して，そもそも平民政権

が臨時行動委員会の中心的主張の一つであり，その特質は「農労を重心とする闘争同盟を固める」ことにあり，どうして「変更と改正の必要があろうか」と反論して，「もしわれわれが中国商工業の作用をおろそかにして認識を誤れば，革命は必ず惨敗をもたらし，結果のないもの」になるとする鄧演達の言葉を強調した[85]。

第三に，新しい党中央の樹立をめぐってである。興味深いのは，各省市連合事務所は章伯鈞らの党の改組活動の正統性を否定すると同時に，「一部忠実純正の中央幹部が消極的に回避して，戦う責任を持っていない」と臨時行動委員会の中央に対しても批判し，鄧死後の1年間臨時行動委員会中央は指導していない，委員会自体も救いようがないと指摘した点である[86]。そこで連合事務所は臨時行動委員会中央の代りに，党の危機を救うための過渡的機構として，臨時行動委員会の職権を代行し，各地の党務を整理し，全国代表党大会を企画して，正式に中央を樹立すると通告した。その具体的な段取りは1年間を目標にして，最初の3ヵ月は組織の視察整理，また6ヵ月は理論の研究，その次の2ヵ月は各地幹部の総合討論，最後の1ヵ月は全国の党代表会となっていた[87]。

実際にはその計画は実現されなかった。各省市連合事務所の指導者季方は「内部の紛争に悩まされたばかりか，資金源も絶たれた。1932年9月中旬，彼は北辰中学の資金集めを理由に西北へその他の道を探しに行った」と言われている[88]。各省市連合事務所はただ2期の『行動通訊』を出しただけで終った。

以上から明らかなように，鄧演達の没後，臨時行動委員会中央は実質上崩壊してしまった。章伯鈞が率いる中国問題研究会の第三党の党名，第三党政権の性質などの問題をめぐる，臨時行動委員会中央との対立は，事実上かつての譚平山と鄧演達の論争の延長線上にあり，この旧共産党系と国民党左派系グループのイデオロギー対立は鄧の死後再び顕在化したのであった。注目しておかなければならないのは，この時期の章伯鈞の思想的変化が，後に第三党の中共への接近，及び1947年の第三党の農工民主党への改名に決して無関係ではなかったという点である。そこで次にこの時期の章伯鈞の思想を検討することにしたい。

2　章伯鈞の農工革命論

初期における章伯鈞の思想を伝える資料は極めて少ない。1932年11月に章伯鈞が各省市連合事務所の批判に応じるために発表した「最近の政治主張」と題する長い論文はもっとも体系的にこの時期の彼の考え方を示している。譚平山の「宣言草案」，鄧演達の「中国国民党臨時行動委員会政治主張」（以下，「政治主張」と略す）と同じように，章伯鈞もこの「最近の政治主張」を第三党の改組に向けて政治綱領として提出した。したがって，ここではこの論文を中心として，譚平山，鄧演達の思想と比較しながら，章伯鈞の考え方を見ていきたい。

まず中国の社会の特質の分析において，譚平山と鄧演達はともに中国社会を半植民地半封建の社会としてとらえていた。そして中国革命はブルジョア的な平民革命であり，その前途は社会主義であると結論づけた。両者が異なっているのは，鄧演達の「政治主張」が譚平山の「宣言草案」に比べ，「中国社会全体はまだ封建勢力支配の段階にとどまり，まだ前資本主義の段階にある」[89]と中国社会の前資本主義的特質を強調し，プロレタリアート革命の必要性を低く評価している点であろう。注目すべきは，章伯鈞の「最近の政治主張」が鄧演達の前資本主義社会の概念を受け継ぎながらも，半封建半植民地の概念を使っていない点である。章は中国社会発展の現段階は，アジア式の封建社会から資本主義社会への転換の段階にあるとし，「中国社会は前資本主義で，転換期の過渡的な社会である。一方ではアジア式の農業，手工業生産及び商業資本の高利貸の複雑で錯綜した基礎を有するに留まり，また一方では近代資本主義の侵略の大きな流れを迎えようとしている」[90]と述べた。すなわち章伯鈞は中国社会を「アジア式の特殊で複雑な社会」としてとらえたのである。アジア的専制社会という規定は，マルクスがその著『経済学批判』(1859) の序の中で「おおづかみに言って，アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的生産様式をもって，経済的社会構成の継起的諸時代と称することができる」と述べたことに由来した。1930年代，中国の各党派の知識人はこの問題をめぐり大きな論戦を行なった[91]。鄧演達も中国の政治形態を「アジア式の官僚政治」としてとらえたことがあり，彼は「アジア式の官僚政治は秦から2千年にわたって中国を統治した。この2千年の間，政治機構の変遷は少なくなかったにもかかわらず，本質

上において終始大きな変化はなく」，このような政治機構は「集中した官僚制度を特質として，統治者は無限の特権を有する」[92]と述べた。

章伯鈞はアジア的生産様式の特質から，中国革命の独自性を強調した。彼は中国革命を欧米のブルジョアジーが指導したブルジョア革命とも，プロレタリアートが単独に指導した社会主義革命とも異なる農工民主革命として位置づけ，この革命は「中国大多数の農労大衆の力をもって，対内的には残った封建勢力を一掃し農工民主政権を樹立し，対外的には帝国主義の侵略勢力を粛正して，独立と自由な国家を樹立させる」と述べ，その建設の過程において，「農労大衆は政権を奪取した後，一方では土地革命を実行して，封建勢力の基礎を崩し，また一方では国家の力をもって，国家の計画経済を推進し，国営公営の産業を建設する。そして，私有資本を取り除き，産業を発展させ，社会主義の建設へと発展させる」と指摘した[93]。章伯鈞はこのような革命の手順を「農工民主革命（あるいは農工平民革命）」と言い，また上述した経済建設の過程を資本主義から社会主義への過渡期の国家資本主義であると称した[94]。

では次に，章伯鈞は実際に中国革命の各勢力をどのようにとらえていたかを見てみよう。

中国革命の指導勢力の評価において，譚平山と鄧演達はともに労働平民階級を中国革命の主要な勢力としたが，両者はその労働平民階級の範囲の規定が異なっていた。譚平山のいう労働平民階級とは即ち工業労働者（産業労働者と手工業労働者），農業労働者（雇農と小作農），商業労働者（店員と行商人）を指していた。譚はこの労働平民階級は小ブルジョアジー（小手工業者，小自作農，小商人）と密接に同盟を結んで革命の階級を構成し，中華革命党はすなわちこれらの革命的階級の代表であると述べた[95]。鄧演達は，臨時行動委員会を大多数の労働者大衆の利益の代表であるとし，これら労働大衆とはすなわち「各種の工場の労働者，手工業者，自作農，小作農，雇農及び生産の設計，生産の管理，運輸流通を担当する者及びその他の社会生産を補助する職業者」[96]であると述べ，革命の勢力をさらに広い範囲に求めた。

章伯鈞は農労革命大衆を「農業労働者」と「都市の平民大衆」に分け，中国革命の指導勢力は特に「農村の小作農，雇農，半自作農及びプロレタリアートとの結合」[97]であると述べ，小ブルジョアジーの働きを強調

していないのが注目される。また彼は中国革命の使命を担う勢力はプロレタリアートだけではなく，農村の労働者階級と都市の広大な平民大衆勢力が合流しなければならないと指摘した。そこで注目しなければならないのは，章のプロレタリアートの指導権に対する認識である。章は，中国社会がアジア式の東方社会であるという特質から，中国社会では直接にブルジョア革命ができないし，プロレタリアート指導下の社会革命と共産主義革命もできないと結論づけた。その理由は，「第一に，社会主義革命を指導するプロレタリアートの勢力から言えば，中国の産業資本がまだ極めて幼稚な揺籃期にあり，中国のプロレタリアートの数が人口全体に占める割合も非常に少ないので，単独に中国革命を指導する階級としての力を欠いている」ことである。また「第二に，社会主義革命の本質から言って，社会主義革命の対象は高度の資本主義統治である」が，「現時点における最重要な革命の巨大な敵は残存する封建勢力であり，また帝国主義の政治的圧迫と経済的圧迫及びその二つの巨大な勢力に結びつく付属物である」ことであると述べた[98]。その意味において，章伯鈞は，中共が「未来派の革命集団」であり，プロレタリアートの革命組織であると述べ，また中国革命の過程における中共の「社会を推進させ，闘争を引き起こさせる」積極的な役割を評価しながらも，中共の呼びかける共産主義革命が「中国の現段階における現実的な革命的要求を否定し」，「絶対に現時点の中国の客観的現実の要求に適応できない」という認識を示した[99]。この評価は，臨時行動委員会の中国共産党の勢力を消滅しなければならないという立場から大きく離れ，譚平山の中華革命時代における中共に対する認識に近かったことがわかる[100]。

また国民党に対する評価に関しては，章伯鈞は孫文指導の時代において，国民党は中国革命に大きな歴史的役割を果したが，1927年以後国民党は変質して，その政治綱領も時代の進歩及び社会の客観的要求に適応しなくなり，国民党の組織も地主ブルジョアジー及び軍閥官僚の集団に変化し，「中国国民党の存在は国家，民族，社会を死なせるものとなった」と指摘して，必死に国民党と戦わなければならないと呼びかけた[101]。この立場は明らかに譚平山の「宣言草案」に近い。鄧演達は臨時行動委員会を孫文が作った国民党の正統な後継者と見なし，蔣介石の南京統治に反対しているものの，国民党自体には明確には反対しなかったのであ

る[102]。

次に農工民主政権の具体案[103]については，章伯鈞によると，農工民主政権の組織形態は国民党の「以党治国」に反対し，また欧米の三権分立制にも反対している。その権力構造は次の通りである。（1）農工民主政権の組織形態は，最高権力機関は国民代表大会であり，その構成は，直接に生産に参加する農民と労働者が60％，職業団体と準職業団体（革命的兵士を主な構成員とする）が40％を占める。（2）中央政権と地方政権の関係については，「中国の歴史地理及び経済条件に応じ，中央と地方の権限を適当に配分し，外交，軍事及び全国産業の統制，全国の交通，全国の財政に関する中央が行なうべきことを除き，その他は地方が責任を負って自主的に管理する」[104]。（3）政権の維持については，労働生産者の武装力すなわち農工革命軍を創設し，革命を保護する。

その他に章伯鈞が提出した「最近の政治主張」では対外政策と対内の経済政策，土地政策，労働者と兵士の利益に関する政策，社会政策，教育と文化政策なども具体的に論じられていた。

以上から明らかなように，農民と労働者を第三党の政権構想の中心に置くことに関しては，章伯鈞の「最近の政治主張」は譚平山と鄧演達の平民政権論と本質的に同じであった。そこで問題となるのは，小ブルジョアジーに対する政策である。

譚平山は第一次国共合作後の中共の都市小ブルジョアジーの排除の政策を批判し，革命の指導勢力として，「労農と小ブルジョアジーとの同盟の必要性」[105]を強調した。鄧演達の平民政権論は国家資本主義の建設及び中小規模の私的企業の発展を掲げていた。その革命を指導する平民大衆には言うまでもなく，直接及び間接に生産過程に参加した小ブルジョアジーを含めたのである[106]。章伯鈞は小ブルジョアジーについて，彼らは「何が中国革命の前途であるかは把握できず，革命の行動と勇気を欠いている」と，小ブルジョアジーの中国革命における指導力に不信を表明した。また章は「破産した小ブルジョアジーの農民（富農を除く），小商人，自由職業者，小中学校の教師及び下層の公務員など，彼らは経済及び政治上の圧迫を受けているだけでなく，根本的には統治階級に投降する技能と機会にも欠けている」という分析から，現時点における小ブルジョアジーの大多数はまだ革命的であると言いながらも，革命の指

導階級ではないと結論づけた[107]。さらにその経済政策を見て分かるように，章は民族ブルジョアジーの役割を低く評価していたのであった。

以上述べてきたように，章伯鈞が従来の第三党の立場から転換した背景には，第三党の過去の幾度かの失敗と分裂に対する章の反省があり，また小ブルジョアジーの役割を低く評価した背景には，彼の第三党党内の「国民党民主主義者」[108]（すなわち国民党左派）に対する批判があった。この認識は章伯鈞の政治的立場を大きく急進化させ，後に第三党が中共との協力への路線に転換するのにつながっていったのである。

5．結語

本稿では，章伯鈞の若き日の国民革命参加への過程及び初期第三党における活動，役割，思想の変化の検討を通じて，以下の諸点を明らかにした。

第一に，20世紀の激動の中国は，この世紀と共に成長してきた多くの若い知識人を革命の道に導き，章伯鈞も深くその時代の大きな思想的潮流の中で，共産主義思想と孫文主義思想を受け入れたのであった。章伯鈞の立場は，分極化してゆく中国政党政治発展のなかで，「国民党より左，共産党より右」[109]という第三の道を探ろうとしていた点にあった。これは彼のような革命化された一部の知識人に共通して見られる点であり，第三党の思想的基盤となったと言える。

第二に，初期第三党の結合は極めて弱体であった。中華革命党と臨時行動委員会はそれぞれ2年もしない内に，周囲からの圧迫及び内部分裂のため，崩壊状態に陥ったのである。その主たる原因は，元中共党員と国民党左派から組織された第三党があらたに党を統合していくイデオロギーを創出できなかったことに求められる。イデオロギーの政治的機能には党員に対し，「一定の目標と価値を与え，連帯感と一体性をもたらすこと」がある[110]。初期第三党はいずれの時期においても，元中共人士と国民党左派人士という二つのグループが孫文の三民主義の遺産及び新党の名称をめぐり，党内で論争と分裂を繰り返していた。章伯鈞は元中共系の主要な人物でありながら，国民党左派系にも近かったことから，この二つのグループの橋渡し的役割を果した可能性がある。しかし譚平

山が第三党から離脱し，鄧演達が没した後，章は譚平山の従来の主張に次第に傾いていったことがわかる。その変化の背景には彼の，第三党の幾度かの分裂と失敗に対する反省と国民党民主派（左派）に対する強い不信感があったと言える。

第三に，このような章伯鈞の思想的変化は，彼に農工革命論を提起させることになった。章伯鈞の農工革命論は小ブルジョアジーを中国革命の指導階級から排除し，ブルジョア階級に反対することを特徴としたが，これは明らかに譚平山の労働平民革命論，鄧演達の平民大衆革命論より一層急進化したものであった。そもそも第三党結成は，中共の急進化すなわち小ブルジョアジー，民族ブルジョアジーという中間階級を排除する政策に対する反発を大きな契機としていたのである。譚平山はかつて明確に，小ブルジョアジーを革命指導階級の一部分とし，鄧演達も具体的に民族資本発展の奨励策を打ち出したのである。その意味から第三党は中間階級の政党として位置づけられるが，章伯鈞の農工革命論は譚平山，鄧演達の路線と異なり，当時の中共の中間階級を低く評価する左傾路線と共通点があったと言える。

しかしながら，章伯鈞の農工革命論の内実は必ずしも明確ではない。まず農工階級の定義について，譚平山の労働平民階級論と鄧演達の平民大衆論と比べ，章伯鈞は具体的に農工階級に関する分析を行なわなかった。例えば，章伯鈞はプロレタリアートと農村の貧しく苦しい農民（特に小作農，雇農，破産した自作農），都市の平民大衆が共に中国革命の指導勢力であるとしていた[111]が，しかし何を基準として都市の平民大衆を定義するかは曖昧である。章伯鈞は農工党を農労平民大衆の前衛隊とし，政権の奪取と農工民主政権の樹立のために戦い，また政権樹立後，「中国人民の意思による投票選挙で政権を執る」[112]と述べた。一方で国民党の「以党治国」に反対しながらも，また一方で「党団の方式で，政権の核心を掌握する」[113]ことを提唱したが，それは複数政党制かそれとも一党独裁によるかは，必ずしも明確ではなかったのである。つまり，第三党のイデオロギーの再創成は依然として大きな課題として残っていたと言えるのである。

注

1) 第三党は第一次国共合作分裂後，中国国民党と中国共産党に対抗して生まれた，第三の道を唱える中間勢力であった。それは中華革命党，中国国民党臨時行動委員会，中華民族解放行動委員会を経て，1947年に中国農工民主党に改名された。現在は中国民主諸党派の一つである。第三党の由来に関しては，『鄧演達的道路』（鄧演達先生殉難一五周紀念委員会編印，1946年），83頁，また楊匏安「所謂第三党」（『布爾什維克』第17期，1928年８月13日），藍玉光編『第三党討論集』（上海黄葉書店，上海，1928年），施存統『目前中国革命問題』（上海復旦書店，上海，1929年），中村農夫「第三党成立より今日迄（上）」，『上海毎日』1933年11月19日（外交資料館『支那内乱関係一件・福建独立運動・輿論与新聞論調』），J. Kenneth Olenik "Deng Yanda and the Third Party", Roger B. Jeans, *Roads not taken; the struggle of opposition parties in twentieth-century China*, Westview Press, San Francisco, 1992, p. 111 を参照のこと。
2) 王実甫「第三党的創始及没落」，『現代史料』第１集（波文書局，香港，1980年重印），263頁。
3) 従来の章伯鈞研究としては，1930年代に書かれたものに，起風「談談章伯鈞」，孫敏「章伯鈞与第三党」，『現代史料』第４集（波文書局，香港，1980年重印，154～170頁），情報部「閩変主要人物略歴」（外交資料館『支那内乱関係一件・福建独立関係』第１巻）がある。それ以後のものとしては，李健生主編『章伯鈞生平（徴求意見稿）』（油印，年月不詳，中国農工民主党党史資料研究委員会蔵），周天度「章伯鈞」（厳如平・宗志文主編『民国人物伝』第５巻，中華書局，北京，1986年，92～99頁），「章伯鈞」（李鵬・張嘉敖編『安徽歴代名人』，黄山書社，合肥，1986年，299頁）がある。
4) 1957年の反右派闘争の時期，章伯鈞は右派分子として批判され，1969年に死去した。章は現在でも右派のレッテルが貼られている数少ない人物の一人である。
5) 章伯鈞「従童年回憶講起」，上海『文匯報』1956年10月29日。
6) 王郁之「武昌高等師範学校記略」，『武漢文史資料』1986年第２輯（中国人民政治協商会議武漢市委員会文史資料研究委員会，武漢，1986年），２～17頁。
7) 章伯鈞「関於『五四』的回憶」，上海『文匯報』1947年５月４日。
8) 同上。
9) 房秩五，1877年安徽樅陽生まれ。1904年日本に留学，帰国後，速成師範学校を創設，安徽教育総会幹事などを経て，1913年湖北省宜昌鑛金局の局長，秦皇島柳江炭鉱の取締役となり，1921年に蕪湖道尹に就任した。

1966年に死去。

10) 廖煥星「武昌利群書社始末」,『五四時期的社団』1（三聯書店，北京，1979年），205頁。また田子渝・任武雄ら『惲代英伝記』（湖北人民出版社，武漢，1984年），54～46頁。

11) 房師亮は房秩五の息子である（李健生前掲書，12頁）。

12) 周天度前掲論文，92頁。

13) 中共ドイツ支部については，張申府「中国共産党建立前後情況的回憶」,『一大前後』（人民出版社，北京，1986年），551頁，「張申府談旅欧党団組織活動情況」,『天津文史資料選輯』第15輯（天津人民出版社，天津，1981年），90～91頁。

14) 廖煥星「中国共産党旅欧総支部」，前掲『一大前後』，507～509頁。

15) 金冲及主編『周恩来伝』（人民出版社，北京，1989年），73～74頁。

16) 卞杏英・尤亮「孫炳文」,『中共党史人物伝』第16巻（陝西人民出版社，西安，1984年），17～18頁。

17) 前掲起風「談談章伯鈞」，155頁。また謝樹英「八十七春秋憶往事」,『文史資料選編』第36輯（北京出版社，北京，1989年），95頁。

18) 前掲章伯鈞「従童年回憶講起」。

19) 郭沫若「紀念鄧択生先生」,『鄧演達』（中国文史資料出版社，北京，1985年），6頁。

20) 同上。また徐彬如『六十年歴史風雲紀実』（中国文聯出版公司，北京，1991年），13頁も参照。

21) 徐彬如前掲書，13頁，前掲孫敏「章伯鈞与第三党」，161頁。周谷城「懐念章伯鈞同志」,『周谷城伝略』（山西人民出版社，太原，1987年），91頁も参照。また一説では章伯鈞がベルリン大学で哲学の博士号を取ったという（李健生前掲書，17頁）。

22) 北伐軍総司令部政治部の成立の時期を，孫炳文は1926年6月19日であるとしていた。この点に関しては「孫炳文報告総政治部工作」,『広州民国日報』1926年11月1日を参照。

23) 章伯鈞の総政治部での職については，従来宣伝科長として紹介されてきた（鄒翠芬「総政治部野史」,『現代資料』第2集，波文書局，香港，1980年重印，143頁。また，李健生前掲書，18頁，周天度前掲論文，92頁を参照）。一方，李一氓は総政治部の成立後，章伯鈞は最初に組織科長であったと記述している（李一氓「北伐和南昌起義」,『中共党史資料』第39輯（中共党史出版社，北京，1991年，7頁）。この時期の『漢口民国日報』の記載から，李の説を確認できる。また『広州民国日報』1926年11月29日をも参照。

24) 郭沫若「北伐途次」,『革命春秋』（人民文学出版社，北京，1979年），4

頁。郭は1926年9月から政治部主任を代行していた（『広州民国日報』1926年9月25日）。

25) 『広州民国日報』1926年12月21日。

26) この時期の国民党左派と蔣介石の関係については，山田辰雄『中国国民党左派の研究』（慶応通信，1980年），170～172頁を参照。

27) 張国燾『我的回憶』第2冊（明報月刊出版社，香港，1973年），572頁。また鄒翠芬前掲論文，142～143頁，土肥義明「武漢における革命の展開と鄧演達」,『新潟史学』第18号，1985年，62頁も参照。

28) 鄒翠芬前掲論文，143頁。また，当時の章伯鈞の正式の職務については，「総政治部招待新聞界」,『漢口民国日報』1926年2月7日を参照。

29) 趙春珊「北伐親歴記」,『文史資料選編』1985年第1輯。

30) 『広州民国日報』1926年1月6日，及び『漢口民国日報』1927年2月10日。

31) 『広州民国日報』1927年1月17日。

32) 前掲「総政治部招待新聞界」，また李一氓前掲論文，10頁。

33) 『漢口民国日報』1927年2月26日。

34) 「周恩来同志在農工民主党五幹会議上的報告」（記録稿）。この記録稿は北京の農工民主党党史研究委員会にある。

35) この点については，1927年4月15日付の『広州民国日報』，1927年4月9日付の上海『申報』，また前掲「孫炳文」,『中共党史人物伝』第16巻，24～26頁を参照すること。

36) 鄧演達「在国民党中央政治委員会第一五次会議上的臨時報告和発言」,『鄧演達歴史資料』（華中理工大学出版社，武漢，1989年），116頁。

37) 中国農工民主党中央党史資料研究委員会『中国農工民主党的奮闘歴程』（中国文史出版社，北京，1990年），77～78頁。

38) このことに関しては，金冲及前掲書，141頁，及び郭沫若「余家埠」,『革命春秋』（人民文学出版社，北京，1978年），196～197頁を参照。

39) 陳濤「参加南昌起義的回憶」,『南昌起義』（中共党史資料出版社，北京，1987年），367頁。また同書586～589頁を参照。

40) 李一氓の前掲の文章と郭沫若の前掲「余家埠」には「党代表」と書いてあるが，1927年6月23日付の『漢口民国日報』では副党代表とされている。ここでは『漢口民国日報』による。

41) 李一氓前掲論文，19～22頁。

42) 「中国国民党革命委員会令」，前掲『南昌起義』，22頁。

43) 前掲「余家埠」，226頁。

44) この点については，拙稿「第一次国共合作分裂後の第三党と中共」,『法学政治学論究』第18号（慶応義塾大学法学政治学論究刊行会，1993年秋

季号)，90～92頁を参照。

45) 李立三「党史報告」，前掲『南昌起義』，174頁。また『中共中央文件選集』第3冊（中共中央党校出版社，北京，1989年），478頁をも参照。

46) 「章伯鈞在1951年談農工民主党歴史（1927～1947年）」（記録稿）。この資料は現在中国農工民主党党史資料研究委員会に所蔵されている。

47) この点に関しては，例えばその中には，葉挺（元第一一軍二四師団長，広州暴動の紅軍総司令），葉剣英（元第四軍参謀長官，広州暴動の紅軍副総司令），韓麟符（元国民党中央委員，中共北方区の責任者），呉明（元賀龍の事務局長，中共党員），林祖烈（元九江関監督，中共党員）などがいたと記述している資料もある（徐善輔「共産党分裂史」，『現代史料』第1集，波文書局，香港，1980年重印，232～233頁。また「第三党史略」，国民政府中央統計局，年月不詳，手書き。『中国党派』，中聯出版社，1937年）。

48) 「中国国民党臨時行動委員会対中国及世界革命民衆宣言（1927年11月1日）」，『革命行動』第1期，1930年9月1日。

49) 前掲「章伯鈞在1951年談農工民主党歴史（1927～1947年）」。郭沫若の日記にも郭がこの時期病気にかかり，周恩来，第三党が共に彼に働きかけたことを記述している（郭沫若「離滬之前」，前掲『革命春秋』，271～272頁）。また，『郭沫若年譜』上巻（天津人民出版社，天津，1982年），185頁を参照。

50) 譚平山は新党の主義を提唱するため，『科学的三民主義』という本を編集した。そのなかに譚平山，鄧初民，宋慶齢，蘇兆徴の文章があり，また「国民党第一次全国代表大会宣言」などの文件も含まれていたという（姜平『中国民主党派史』，武漢大学出版社，武漢，1982年，21頁）。現在その書物の所在は不明である。

51) 張曙時，1884年江蘇省寧睢生まれ。1906年日本に留学，1909年南京で中国同盟会に加入，1921年南京建寧大学の校長を務め，また中国国民党南京支部長，国民党江蘇省党本部常務委員などの職を歴任した。南昌暴動後，彼は譚平山らの新党の創設にかかわり，中華革命党成立後に離脱したという（喬毅民・門孔壁「張曙時」，『中共党史人物伝』第33巻，陝西人民出版社，西安，1987年）。

52) 流火「第三党的真相和它的命運」，『機会主義的第三党』（中国国民党河北省党務指導委員会宣伝部編印，1928年），38頁。

53) 楊匏安「所謂第三党」，『布爾什維克』第2期，1928年2月3日。

54) 「中華革命党党綱」，「中華革命党宣言草案」，『中国農工民主党歴史参考資料』第1輯（中国農工民主党党史資料研究委員会，北京，1981年），17～44頁。

55) 中華革命党は，一説によれば，1928年の春，ある外国人が経営したホテルで会議を開き，成立したと言われている（彦奇『中国農工民主党歴史研究［民主革命時期］』，中国人民大学出版社，北京，1984年，8頁）。しかし，何をもって中華革命党の成立とするのかその根拠は必ずしもあきらかではない。いま一つの説では，1930年に鄧演達が帰国するまでは正式の党の組織は成立しなかったとされる（前掲『中国農工民主党的奮闘歴程』，6頁，80頁）。だが，1928年の春以後，中華革命党の指導機関，党綱と政綱，機関誌，中央と地方の組織はすでにできていたので，中華革命党が独立の政党として存在していたといえる。なお，中華革命党の成立時期は「鄧演達遺札」を参照（『文史資料選輯』第26輯，中国文史出版社，北京，1993年，2～3頁）。

56) 中華革命党の中央指導機構に関しては，彦奇と元邦建は前掲書の中に明記していない。中統局の資料には「政治局」，「事務局」と記録してある（前掲「第三党史略」）。中華革命党の「訓令第一号」の内容から中華革命党主席団と常務委員の存在が確認できる。

57) 前掲『中国農工民主党歴史研究［民主革命時期］』，8頁，『中国農工民主党的奮闘歴程』，80頁，及び前掲『譚平山伝』，127頁。

58) 正之「第三党内幕」第1期，1928年，43～45頁。また前掲「鄧演達遺札」，28頁を参照。

59) この問題に関しては，前掲拙稿「第一次国共合作分裂後の第三党と中共」，93～98頁を参照。

60) 中華革命党の「党綱」，「政綱」および「中華革命党宣言草案」が制定された後，鄭太朴はそれを携えて，ドイツにいた鄧演達の意見を求めたことがあったという。鄧は中華革命党の党名に反対し，また党の綱領について，これは「ただ三民主義の帽子をかぶっただけで，その実質は取り替えられている」と不満を示し，「中華革命党宣言草案」の公表にも反対した（「訪問全国人大常委，江西省副省長李世璋同志記録」，前掲『譚平山伝』，127頁，前掲『中国農工民主党的奮闘歴程』，79～80頁）。なお前掲「鄧演達遺札」，11頁，15頁も参照。

61) 前掲「章伯鈞在1951年談農工民主党歴史（1927年～1947年）」。また中華革命党の資金源は主に鄧の元の総政治部の資金「断金学会」にたよっていた。その財務主管は季方と丘萼華であった。鄧演達は直接季と丘を通じてその財源を支配していた。譚平山は生活にたいへん苦しんで，充分に「断金学会」の援助が得られなかったことが鄧の手紙から明らかにされた（前掲「鄧演達遺札」，13，15～16，18，50～51頁）。

62) 「在白色恐怖下如何健全党的組織」（『周恩来選集』上巻，人民出版社，北京，1980年），19～20頁。また，金冲及前掲書，167頁，188～189頁を

参照。

63) 前掲「章伯鈞在1951年談農工民主党歴史（1927年～1947年）」。

64) 前掲「鄧演達遺札」，10，12頁を参照

65) 前掲『中国農工民主党的奮闘歴程』，81頁。

66) 彦奇前掲書，20～21頁。元邦建前掲書，137頁。

67) 前掲「周恩来在農工民主党五幹会議上的報告」(記録稿)，1949年11月22日。

68) 山田辰雄前掲書，250～263頁，また張憲文主編『中華民国史綱』（河南人民出版社，鄭州，1982年），358～378頁。

69) 張憲文前掲書，369頁。

70) 鄧演達らによる蔣介石の南京政府を倒す計画については，朱蘊山「懐念亡友鄧演達」，『紀念朱蘊山文集』（中国文史出版社，北京，1988年），55頁，また陳銘枢「『寧粤合作』親歴記」，『文史資料選輯』合訂本第3冊（中国文史出版社，北京，1988年），55頁も参照。

71) 羅任一「鄧演達回国組党」（前掲『鄧演達』），116～118頁，張履彬・李同力「回憶李世璋」，『江西文史資料』第20輯（中国人政治協商会議江西省委員会文史資料委員会，南昌，1986年），49頁，また彦奇前掲書，35頁。

72) 陳敬斎（別名は陳垂正），江西省景徳鎮出身。臨時行動委員会上海幹部会のメンバーで，第一次国共合作分裂後中共から離脱，王枕一の紹介で第三党に加入したという。1951年中国政府に逮捕され，処刑された（胡蘭畦『胡蘭畦回憶録』，四川人民出版社，成都，1987年，208～209頁，及び前掲『紀念朱蘊山文集』，129頁，彦奇前掲書，41頁を参照）。

73) 王実甫「第三党的創始及没落」，前掲『現代史料』第1集，265～266頁。

74) 問漁「始終背時的第三党」，前掲『現代史料』第4集，132～133頁。

75) 前掲『中国農工民主党的奮闘歴程』，91頁。また1931年11月の臨時行動委員会の代表大会について，Lloyd E. Eastman は章伯鈞が会議で社会民主主義の原則に反対する報告を行ない，大混乱を引き起こしたため，新党首は選出されなかったとしている（Lloyd E. Eastman, *The abortive revolution; China under Nationalist rule, 1927–1937*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1984, p. 96）を参照。なお培宣「第三党之形成与幻変」，前掲『現代史料』第4集，126頁も参照。

76) 方栄欣「一個愛国者的道路」，『記念季方』（中国文史出版社，北京，1990年），20頁。

77) 李正西・洪嘯涛『朱蘊山』（黄山書社，合肥，1988年），76頁，季方「懐念朱蘊山同志」，前掲『紀念朱蘊山文集』，15頁を参照。

78) 張紅華「王枕心的生平」，『江西文史資料選輯』第13輯（中国人民政治協商会議江西省委員会文史資料研究委員会，1984年），89頁，また前掲「第三党的創始及没落」，266頁。

79) 前掲謝樹英「八十七春秋憶往事」，103頁。

80) 陳長松「農工民主党在北平的早期活動（1）」，『北京農工』1992年7月。

81) 同上。

82) 前掲『朱蘊山』，76頁。

83) 「通告（聯字第1号）」，前掲『中国農工民主党歴史参考資料』第2輯，259頁。

84) 「通告（聯字第2号）」，同上，261頁。

85) 同上，262頁。

86) 同上，259頁。

87) 同上，263頁。

88) 方栄欣，前掲論文，20頁。

89) 「中国国民党臨時行動委員会政治主張」，『革命行動』第1期，1930年9月1日，42頁。

90) 章伯鈞「我們最近的政治主張」，前掲『中国農工民主党歴史参考資料』第2輯，278頁。

91) 第一次国共合作分裂後，最初にソ連で中国社会の性質に関して，マルクスの「アジア的生産様式」の問題をめぐり，激しい論戦が行なわれ，後日本にも波及した。1930年代には中国の各党派，無党派の知識人は中国社会の性質をめぐる討論に伴なって，中国社会史の問題に関する大きな論戦を行なっていた。その大きな争点の一つは，すなわちマルクスのいうアジア的生産様式に対する認識であった。郭沫若は最初に原始共産主義と言い，後に奴隷社会以前の族長制であったとした。呂振羽は初期国家は奴隷制であると主張した。王宜昌は東方の封建社会であると言い，胡秋原はアジアの専制主義であると主張するなど，種々の説があったが，アジア的生産様式をいかに定義するかという点は，いまでも残されている重要な問題である。

92) 鄧演達「南京欽定的国民会議和我們所要求的国民会議」，『鄧演達文集』（人民出版社，北京，1981年），137頁。

93) 前掲「我們最近的政治主張」，281頁。

94) 同上。

95) 「中華革命党宣言草案」，9頁，15頁。また前掲『中国農工民主党歴史参考資料』第1輯，71頁，60頁。

96) 前掲「中国国民党臨時行動委員会政治主張」，47頁。

97) 前掲「我們最近的政治主張」，287頁。

98) 同上，280頁。

99) 同上，305頁～306頁。

100) 鄧演達と譚平山の中共に対する評価については，前掲拙稿「第一次国共

合作分裂後の第三党と中共」，99～110頁を参照されたい。

101) 前掲「我們最近的政治主張」，304～305頁。

102) 譚平山の提出した「宣言草案」の中には「中華革命党は国民党を敵の党と見なす」という記述があったが，鄧演達の起草した「政治主張」の中には国民党に反対する明確な記述はなかった（前掲「草案」，24頁，『革命行動』第1期，61～62頁）。

103) 前掲「我們最近的政治主張」，306～312頁。

104) 同上，307頁。

105) 前掲「中華革命党綱領草案」，11頁。

106) 前掲『革命行動』第1期，47頁。

107) 前掲「我們最近的政治主張」，290頁。

108) 同上。

109) 前掲「章伯鈞在1951年談農工民主党歴史（1927～1947年）」（記録稿）。

110) 堀江湛・岡沢憲芙編『現代政治学』（法学書院，1985年），48頁。

111) 前掲「我們最近的政治主張」，280頁。

112) 同上，307頁。

113) 同上。

附記　本論文は，1993年慶応義塾大学後期博士課程研究奨励金による研究の成果である。ここに記して感謝の意を表する。